

グッドプラクティショナー 紹介

推薦文

副田あけみさん，土屋典子さん，
長沼葉月さん，松本葉子さんを
グッドプラクティショナーに推薦する理由

安心づくり安全探しアプローチ研究会の実践は、研究者と実践者がともに実践して、実際に役立つアプローチを発達させています。副田あけみ先生、土屋典子さん、長沼葉月さんと松本葉子さんは大学教員ですが、実践者としても高齢者虐待を予防する活動を続けてきました。予防は重要ですが、直ぐに成果はでないで地道な努力と継続が求められます。現場で、目前の高齢者虐待に対して成す術がないと無力感を感じたソーシャルワーカーは沢山いるはずです。この安心づくり安全探しアプローチは、具体的なシートの活用と問題解決ではない解決志向の

視点から関わろうとするので、実践現場のソーシャルワーカーたちに「関わりが変わる体験」をもたらし、「何かができそうだ」という希望を与えてくれます。当初は大学教員中心でしたが、今では現場の実践者らがケースカンファレンスのファシリテータやコンサルタントとして活躍しています。虐待対応においては、過去ではなく未来へパラダイムシフトし、よりよい未来を作っていくための支援が重要です。今後も、益々の発展を期待しています。

(推薦者：埼玉県立大学保健医療福祉学部教授
梅崎 薫)

〈グッドプラクティショナーについて〉

1 背景と目的

- ・よりよい実践を発掘・評価し、広く伝えることにより、よりよい実践が拡大することを目指す。
- ・よりよい実践を行っているソーシャルワーカーの仕事ぶりを紹介することによって、よりよい実践とは何か、よりよい実践のためには何が必要か、などについて読者に考えていただく契機を提供する。
- ・これにより、ソーシャルワーク学会として、理論の発展だけでなく実践の向上を、また、理論と実践の往復運動の促進を目指す。

2 方法

- ・推薦者から候補者名をあげていただき、その推薦理由(200~400字程度)を書いていただく。合わせて、候補者に執筆の承諾をとっていただく。
- ・候補者は学会員以外でも可能。執筆内容は「実践内容」。
- ・承諾を得られた候補者には、編集委員会から「私の実践：ー」といったタイトルで、実践内容を紹介していただくように依頼する(3,200字程度)。

私の実践

安心づくり安全探しアプローチ研究会の実践

—高齢者虐待の防止から多機関協働の地域づくりまで—

土屋典子（立正大学社会福祉学部）

長沼葉月（東京都立大学人文社会学部）

1. 安心づくり安全探しアプローチ（AAA）とは

安心づくり安全探しアプローチとは、当初は家庭内での高齢者虐待防止のために解決志向アプローチを応用して開発されたプログラムです。現在では、施設内虐待防止のプログラムや、多機関協働のコツやケースカンファレンスの進め方等、対人援助現場での困難に向き合うために役立つ様々な手法の開発を続けています。

2. 研究会の立ち上げからプログラム開発まで

1994年以降、家庭内高齢者虐待問題の調査研究および虐待防止に関する研修等に携わっていた副田あけみが、ある研修で、「介入拒否する事例は見守りだけでよいのか、緊急事態が起きてからの保護分離ではなく、そうした事態が起きないようにする支援方法はないのか」という質問を受けました。これに的確に答えられなかった体験が、早期介入による家族支援を通した虐待悪化予防アプローチの開発研究の契機となりました。また、副田は家庭内高齢者虐待事例に対応する専門職が、虐待事例への介入・支援にあたって強い不安や困難を感じ、疲弊しがちであることを見聞きしており、支援者の負担感を少しでも軽減したいと

考えていました。そこで予防的であり、支援者支援ともなるアプローチを開発していくため、解決志向アプローチの研究と実践に携わっていた長沼葉月と、ケアマネジャーとしての実践経験が豊かな土屋典子に声をかけ、3人で研究チームを立ち上げました。

虐待対応に関する内外の文献を検討した結果、児童虐待事例に対するサインズ・オブ・セーフティ・アプローチを援用して、新しい予防的、かつ、支援者を支援できるアプローチを開発できるのではないかということになりました。サインズ・オブ・セーフティ・アプローチの原著者の許可を得て、高齢者虐待事例に対するアセスメント・シートを開発しましたが、形式を模して最初に作ったものは研修参加者の戸惑いが目立ちました。そこで解決志向アプローチについて学び直しつつ、現場の実践者が使いやすいことを第一に情報収集やアセスメントのためのシート、プランニングのためのシート、ケースカンファレンスのためのシート等を開発していきました。また虐待の疑われる家族との関係形成の面接には、小林良二さん（東京都立大学名誉教授）たちが作成された「生活時間アセスメント様式」をご承諾をいただいて「タイムシート」として改変して活用しました。その後研究会のコアメンバーに医療ソーシャルワーカーとしての経験が長い松本葉子さんが加わりました。コアメンバーが中心となってAAAによる家庭内高齢者虐待防止研修を毎年、各地で行っ

ています。

AAA が家庭内高齢者虐待事例対応に有用なアプローチであるかどうかを検証するため、研修前後アンケート調査、研修3ヶ月後アンケート調査、フォローアップ調査を実施した結果、AAA が支援者の困難感の軽減に役立つことが実証されるとともに、虐待する家族との関係づくりを通じた支援が虐待悪化を予防することが示唆されました。そこで、AAA として開発してきたツールとその活用法を、『高齢者虐待防止のための家族支援：安心づくり安全探しアプローチ（AAA）ガイドブック』としてまとめました。また、AAA 開発の経緯と研究から明らかになった成果を、『高齢者虐待にどう向き合うか：安心づくり安全探しアプローチ開発』として刊行しました。

2013年3月から、年に3回程度、不定期にフォローアップ研修を実施してきました。カンファレンスの実施やリフレクティング・プロセスを活用したピアスーパービジョンの実施など、ご参加いただいた方々のご協力で、多彩な活動を展開してきましたが、残念ながらフォローアップ研修は2016年度で中止としています。

3. 協働スキル研修プログラムと施設虐待防止研修の開発

様々な自治体等のご依頼を受け、安心づくり安全探しアプローチに関する研修を行っていましたが、その先々で行政機関と地域包括支援センターとの、また、地域包括支援センターとケアマネジャーとの、あるいは、行政機関の各課間で、協働がうまくいかない、という話を聞くようになりました。そこで、家庭内虐待対応においては、地域包括支援センター、行政機関、ケアマネジャーのそれぞれの協働関係に焦点を当て、うまくいっているときの効果的な実践要素についての分析を地域包括支援センターと行政機関の職員さんたちを対象とする調査から明らかにしました。この調査結果と対話型組織マネジメントの手法を元に「協働スキル研修プログラム」を開発しました。

さらに、施設内虐待防止にも職場内の連携・協働が欠かせないことから、施設職員の不適切なケア観に関する調査や、虐待防止に寄与する職場内のシステムづくりに関する調査を実施しました。これらの結果に基づいて「施設内虐待防止研修プログラム」も作成しました。

4. ケースカンファレンス・シートの開発

ここまでの取り組みから、多機関協働を進める際の核となるのがケースカンファレンスであることが明らかになりました。そこで、多機関の関係者が集まるケースカンファレンスが、チームワーク形成・発展に資する場となるよう、既に作成していたケースカンファレンスのシートを改善しました。改善したシートは「AAA 多機関ケースカンファレンス・シート（略称：多機関カンファレンスシート）」と名付けました。解決志向アプローチを基盤にしている点は以前と変わりありませんが、ヤコ・セックラらの「オープンダイアログ」や、トム・アーンキル「未来語りのダイアログ」等が提示している対話主義アプローチも基盤にし、意見の統一を求めずに方向性を見出せる新たな形のカンファレンスの進め方を提示しています。本シートの有用性を検証するため、2016～2018年度に研修を行い、実事例に対して本シート活用のカンファレンスを実施した専門職へのインタビュー調査を実施しました。調査の結果、その有用性が認められたことを踏まえ、安心づくり安全探しアプローチ研究会編著『チーム力を高める多機関協働ケースカンファレンス』を刊行しました。

5. 現在の取り組み

現在、安心づくり安全探しアプローチ研究会では、AAA 研究会会員である松尾隆義（元区役所職員）や遠藤正芳（市役所職員）も研修講師として活動しています。高齢者虐待に関しては基礎研修（AAA の基本の考え方や情報整理と見立ての視点）、在宅での本人・家族支援（関係形成及び

養護者支援)、施設内虐待防止研修などを行っています。また、高齢者虐待防止以外では、多機関協働のケースカンファレンス研修や、カンファレンスシートを地域づくりに応用する取り組み等も展開されています。

研究会は毎年1回、9月に主催の研修を行っているほか、各地の主に自治体からの要請を受けて研修を行っています。2021年度には、コロナ禍の影響を考慮し、基礎研修及び在宅での本人・家族支援についてのオンライン研修プログラムを開発しました。いくつか修正を要する部分はありませんが、遠隔地からも参加できるということで好評を得ています。今後も、遠隔での研修の手法を工夫していく予定です。

またケースカンファレンスについては、研究会会員の遠藤や芦沢茂喜らが中心となり、実事例のケースカンファレンスにファシリテーターやコンサルタントとして参加する活動も行っています。

実際にケースに関わっている当事者間で「意見の統一を求めずお互いの違いを理解し合いながら方針を見出す」体験をすることで、多機関カンファレンスシートの効果を実感していただいています。高齢者虐待のみならず、子ども・若者支援や生活困窮者支援等、異なる領域からもカンファレンス研修の依頼をいただくことが増えてきており、今後のシートの改善にも役立てていきたいと考えています。

以上、私たちの研究会では、現場の実践者との対話を重ねて、解決志向アプローチや対話主義的アプローチの考え方を基盤にしつつも、実用性の高い様々なツールを開発し、その効果を確認していく実践を積み重ねてきました。2021年度には代表を副田あけみから土屋典子・長沼葉月が共同で引き継ぎましたが、これからも同様の現場に役立つツールの開発を目指す取り組みを着実に続けていきたいと考えています。